

議長賞

再出発を受け入れる社会へ

堺市立 浜寺南中学校 三年

山本 春乃

過去に罪を犯した人が、もし身近にいたらと考えたとき、私は自身の心の奥の偏見に気がつきました。昔罪を犯してしまった人たちと、今街中ですれ違っているかもしれない。そう思うと、少し怖さを感じました。そして同時に、私だけでなく、多くの人々が同じように感じるのだろうと思いました。このとき、私は自分が知らず知らずのうちに持っていた偏見に気づいたのです。

この作文を書くにあたって、以前学校の授業で観た、覚醒剤を使用し捕まった人についての動画を思い出しました。その動画は、主に薬物乱用の怖さを伝えるためのもので、更生に関しても少し触れられていました。ですが、それだけでは足りないと思います。調べてみると、堺にも更生保護施設があること、私たちの身近な場所で更生への支援が行われていることが分かりました。

どうすれば偏見をなくせるのか。さらに調べていくと、非行少年など、問題を抱える子供たちと接し、手助けする「BBS会」の女性へのインタビューを見つけました。彼女は、自分には「壁」があるのだなと感じ、それを取り除くと活動が楽しくなっ

たと話していました。私が持っていた偏見も、彼女が感じた「壁」と近いのだと思います。彼女は、子供たちと直接会話して、打ち解け合ったことで「壁」をなくすことができました。ならば、罪を犯した経験のある人たちに実際に接してみることは、偏見を減らしていく一つの方法なのだと私は思います。

罪を償い、更生を目指して社会に復帰しようとするときには様々な困難に直面します。例えば、引受人が身柄を引き受けるか迷ったり、新しく仕事を始めるために就職先を探しても断られたりすることがあるそうです。このような状況も、再出発しようとしている本人と関わる機会がもっと増えれば打開できると思います。

私は、この作文を書いたことで、更生に関する知識や、それについて考えるきっかけを持つことができました。ですが、世の中にはこういった現状を知らない人もたくさんいます。より多くの人々に現状を知ってもらうには、学校の授業などで、犯罪をした人の立ち直りについて取り上げる機会をもっと増やすべきだと思います。こ

の問題に少しでも関心を持つことで、社会全体に共感の輪を広げていくことができます。私一人でできることは限られています。これからの生活の中で周囲に現状を伝え、共感の輪を広げていきたいです。

